

コリント 第一

12

「めぐみへの そなえを」

コリント人への手紙 I 11章17～34節 愛餐と聖餐

アウトライン

- 0. イントロダクション
- I. 主の晩餐 11章17~34節
- II. 聖書が教える聖餐
- III. まとめと適用

恵みに預かるための備えとは？

聖書から聖餐式を考える



コリントの手紙とは？

- **著者** …使徒パウロ。
- **年代** …55年頃。 **第3回伝道旅行**の途中。
- **執筆場所** …長期滞在中のエペソ。
この後、コリントを再訪。
- **対象** …コリントのキリスト者たち。
(離散のユダヤ人と異邦人)
- **執筆目的** …過ちを正し信仰の成長を促す。



海を挟んで約250km
陸路を廻れば約1,000km

【当時のコリント】

- アカヤ州(ギリシャ南部)の首都
自由民20万人 + 奴隷50万人 = 計70万人
- 国際都市。ローマ人、ギリシャ人…etc。
かなりの規模のユダヤ人共同体も存在。
- 不道德の代名詞。「コリント人のように」
少年への性愛や複数の愛人も当然。
- 神殿娼婦の存在。偶像崇拜が蔓延。

信仰者の自由をはき違えた放縦が問題に



コリントの遺跡
アクロポリスの丘

序文		1:1~9
罪の叱責	①教会内の分裂	1:10~4:21
	②罪に対する懲戒	5:1~13
	③裁判の問題	6:1~8
	④性的放縦の問題	6:9~20
質疑応答	①結婚	7:1~40
	②偶像に捧げた肉Ⅰ	8:1~,
	③使徒の権利	9:1~27
	④偶像に献げた肉Ⅱ	10:1~
	⑤礼拝における秩序	11:2~34
	⑥聖霊の賜物	12:1~14:40
	⑦復活	15:1~58
	⑧献金	16:1~12
あいさつ		16:13~24



- 秩序
- 秩序
- 秩序
- 性
- 性
- 偶像
- 秩序
- 偶像
- 性
- 秩序
- 秩序
- 秩序



I. 主の晩餐 Iコリント11章17~34節

【本題に入る】 1コリント11:17

ところで*、**次のこと***を命じるにあたって、私はあなたがたをほめるわけにはいきません*。
あなたがたの集まりが益にならず、かえって害になっている*からです。

*基礎の教えに忠実な点はほめられていたが…。

➔ここから本題である聖餐の問題に入る。

*信者の集會が害になる ➔最悪の状況

■かぶりもの問題には、裁量の余地があった。

➔**聖餐の問題***は、厳密な対応が求められる。



【分派・分裂について】 | コリント11:18~19

まず第一に、あなたがたが教会に集まる際、あなたがたの間に分裂があると聞いています。ある程度は、そういうこともあろうかと思えます。

実際、あなたがたの間で本当の信者が明らかにされるためには、分派が生じるのもやむを得ません*。

*分派問題は、1~4章で厳しく指摘済み

➔ 神の義を通した結果の分派なら仕方がない。

パウロ自身も幾度も体験してきたこと。

■ しかし、コリントの分派は許容できないもの。



【主の晩餐の実情】 | コリント11:20~21

しかし、そういうわけで*、あなたがたと一緒に**集まっても***、**主の晩餐***を食べることにはなりません。

というのも*、食事のとき、**それぞれが***我先にと自分の食事をするので、空腹な者もいれば、酔っている者もいるという始末だからです。

*“**集まっても**、それで”

*“**それぞれが**、なぜなら”

*当初は、**聖餐も愛餐も**一緒に行われていた。

➡持ち寄りの食事会に問題が発生していた。

集まって食事をしても
バラバラでは無意味



【変質していた主の晩餐】 | コリント11:22

あなたがたには、食べたり飲んだりする家がないのですか。それとも、神の教会を軽んじて、貧しい人たちに恥ずかしい思いをさせたいのですか*。私はあなたがたにどう言うべきでしょうか。ほめるべきでしょうか。このことでは、ほめるわけにはいきません。

*富んだ者は先に集まって食事をしていたが、
貧しい者が集う頃には食べるものもない!!

➔主の恵みを分かち合うはずの食事の本質は？



【パン裂きの本質】 | コリント11:23~24

私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげた後それを裂き*、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」

*律法の定める過越祭の裂かれた種なしパンは、十字架で死に、復活されたメシアの象徴。

→モーセ以来続けられてきた過越祭は、メシア、イエスを示していたと明らかに。驚愕の瞬間!!



【贖いの杯】 | コリント11:25~26

食事の後、同じように杯を取って言われました。

「この杯は、わたしの血による**新しい契約***です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」

ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。

*エレミヤが啓示(31:31)した、**新しい契約**が締結!!

*これ以降、過越の食事は福音を記念するものに!!

→主の晩餐、さらに聖餐として教会に定着。



【聖餐への備え】 1コリント11:27~28

したがって、もし、ふさわしくない仕方*でパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯す*ことになります。

だれでも、自分自身を吟味して*、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。

*本質を理解し、適格者として臨んでいるか。

➔福音を理解し、信じているか。

*エノクソス “(裁きを)免れない”

ユダヤ議会は、イエスは“死を免れない”と。

*信者に問われているのは聖餐に臨む態度。



【裁きと報い】 | コリント11:29~30

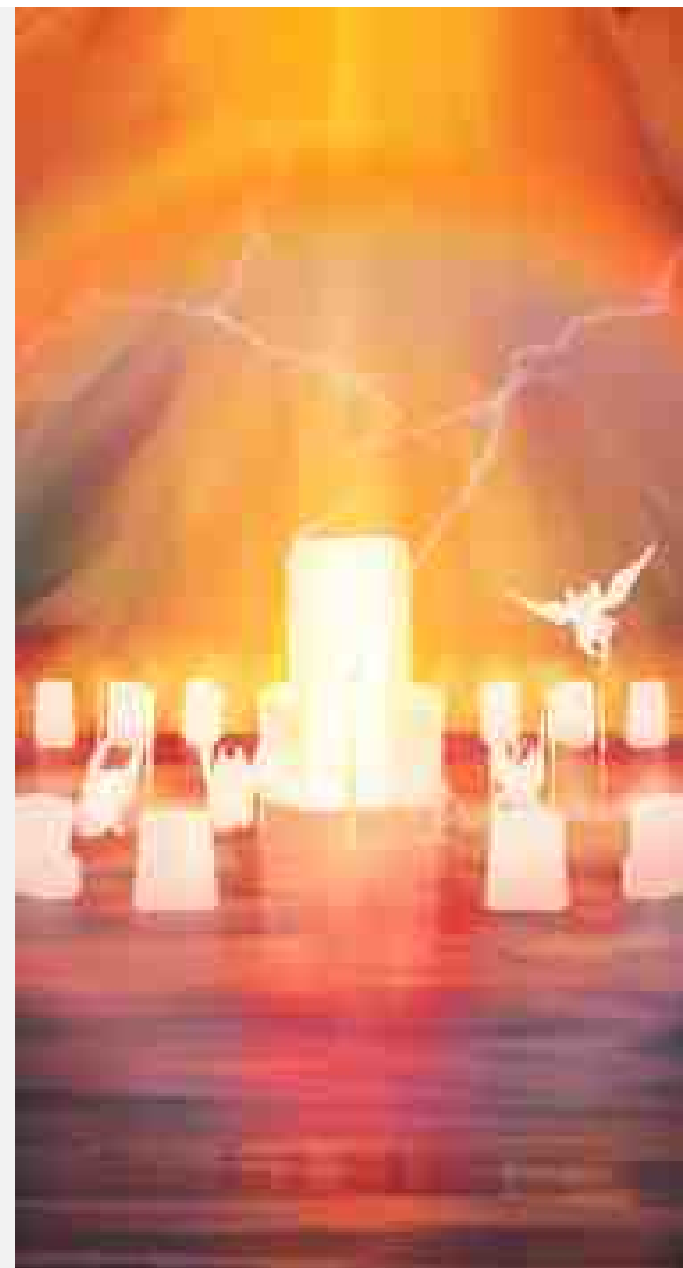
みからだ*をわきまえないで*食べ、また飲む者は、自分自身に対する**さばき**を食べ、また飲む*ことになるのです。

あなたがたの中に弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいる*のは、そのためです。

*見分けない。認識、吟味しない。信じない。

*主イエスが飲み干された、**神の怒りの杯**を**死と復活の福音***を拒む者は、飲むことに。

*信者が主の晩餐を軽んじれば、生涯の間に報いを受けることになる。



【求められる己の吟味】 | コリント11:31~32

しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません*。

私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることがないように*、主によって懲らしめられる、ということなのです。

*見分ける、吟味する、なら、裁かれない。

*信者が罪を犯しても救いを失うことはないが、この世において懲らしめを受ける。

→最悪、肉体の死にいたることもある。



【パウロの提案】 1コリント11:33~34

ですから、兄弟たち。食事に集まるときは、互いに待ち合わせなさい。

空腹な人は家で食べなさい。あなたがたが集まることによって、さばきを受けないようにするためです。このほかのことについては、私が行ったときに決めることにします。

■提案 →先に各自食事をすませてから集うこと。

あくまでコリントの現状に対するもの。

■主の晩餐から聖餐が独立していく契機になったか。





Ⅱ. 聖書が教える聖餐

聖餐を示す聖書の言葉

1 コリ 11:20 しかし、そういうわけで、あなたがたと一緒に集まっても、**主の晩餐**を食べることにはなりません。

1 コリ 10:21 あなたがたは、**主の杯**を飲みながら、悪霊の杯を飲むことはできません。**主の食卓**にあずかりながら、悪霊の食卓にあずかることはできません。

使 2:42 彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、**パンを裂き**、祈りをしていた。

主イエスが命じられている聖餐

ルカ 22:19 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて*、これを行いなさい。」

■ 聖餐の最大の根拠は、**主イエスが命じられている**ということ。

*アナムネシス …“覚える。記念する。思い出す”

使徒によって実行されている聖餐

使 2:42 彼らはいつも、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、**パンを裂き***、祈りをしていた。

使2:46 そして、毎日心を一つにして宮に集まり、家々で**パンを裂き***、喜びと真心をもって食事をともにし、

使20:7 週の初めの日に、私たちは**パンを裂くために***集まった。パウロは翌日に出発することにしていたので、人々と語り合い、夜中まで語り続けた。

■ 過越の食事(最後の晩餐)での主イエスの**パン裂き***が、独立したものとして記念され、使徒たちによって行われていた。

使徒たちの書簡で論じられている聖餐

Ⅰコリ10:16~17 私たちが神をほめたたえる**賛美の杯**は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが**裂くパン**は、キリストのからだにあずかることではありませんか。

パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。

Ⅰコリ11:23~31 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、主イエスは渡される夜、**パン**を取り…

■コリント書の聖餐をめぐる議論は、初代教会での聖餐の証拠。

聖餐式の目的

① キリストを記念する。

「Ⅰコリ 11:24 わたしを覚えて、これを行いなさい。」

過越祭そのものが出エジプトの記念。聖餐は主イエスの記念。

② キリストの死を宣言する。

「Ⅰコリ 11:26 主の死を告げ知らせるのです。」

③ キリストの再臨の保証

「Ⅰコリ 11:26 主が来られるまで」

④ キリストとの交わり。

「Ⅰコリ 10:21 主の食卓にあずかりながら、」

聖餐は、主との和解の食卓。贖いの犠牲は主イエスご自身。

聖餐式への参加資格

① 新生体験

Ⅰ コリ11:29 みからだをわきまえないで食べ、また飲む者は、自分自身に対するさばきを食べ、また飲むことになるのです。

■ 主イエスの十字架の贖いの死と復活の**福音**を信じて**新生**している。

■ 信者は、メシアの死、埋葬、復活を記念し、主イエスの再臨の時まで福音を伝える。

➡ その使命のために聖餐式に参加する。

← 聖餐に預かったなら
派遣されていくべき

聖餐式への参加資格

②自己吟味

Ⅰコリ11:27 もし、ふさわしくない仕方でパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すことになります。

11:29 みからだをわきまえないで食べ、また飲む者は、自分自身に対するさばきを食べ、また飲むことになるのです。

- 主の前に罪を告白し、パンとぶどう酒の意味を噛みしめ、自らの歩みを確認し、畏怖の念をもって、主に感謝すること。
- 自己吟味がなければ、主の懲らしめを受けることも(Ⅰコリ11:30)

聖餐式への参加資格

③ その他

その地域教会の教会員でなければ、参加を認めないというのは？

→ 聖書的根拠はなし。

- 使徒の手紙で、地域教会の壁はない。強調されるのは普遍的教会。福音を信じる者はすべて、聖餐にあずかることができる。

聖餐式の形

- 場所 …教会(信者の群れが集まった場所)。**共同体**が前提。
 - ※最後の晩餐(過越の食事)は、信仰共同体の食事。
- パン …種なしパン(**罪なきメシア**の象徴)
 - ※過越祭(除酵祭)で食すのは、種なしパン。
- ぶどう酒 …赤ワイン(**メシアの贖い**の血の象徴)
 - ※ぶどうジュースでも問題なし(酸化防止剤はなかった)
 - “ぶどうでつくった飲み物” →聖書では同じくくり。
- 順番 …**①**パン、**②**ぶどう酒 →原型は過越の食事。
 - 主イエスが食された順番通り。

聖餐式の頻度

■ 毎日？

使 2:46 そして、毎日心を一つにして宮に集まり、家々でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、

初期のエルサレム教会では、持ち物を分かち合い寝食を共に。

→聖書でも、この時だけの特殊な状況。

■ 毎週？

使 20:7 週の初めの日に、私たちはパンを裂くために集まった。

→パウロを送り出すために集まった、その週の初めの日とも。

■ 聖餐式の頻度に関して、確定的な教えはない。教会の裁量の範囲。

聖餐の執行者

- 地域教会には、他の長老によって按手を受けた長老が置かれた。
(テトス1:5)
- 聖餐は、**地域教会(信仰共同体)が集った場**で行われた。
(使徒20:7、Ⅰコリ11:18~34)
- 聖餐の執行は、**長老によるもの**と理解すべき。
→パウロも、教会の秩序の下にあることを原則として語っている。
(使徒20:7、Ⅰコリ11:18~34)
- 聖餐は、**地域教会に属しない者が、長老にもよらず、勝手に単独で行ってよいものではない。**

参考：アフィコーメンの儀式

■ユダヤ人に現在も過越の食事で行われている儀式。

- ① 連なった三つのポケットに種なしパンが一枚ずつ三枚入っている。
真ん中のポケットから一枚の種なしパンを取り出し、半分に割る。
- ② 半分は食し、半分は布に包んで隣の部屋に隠しておく。
- ③ 食事の最後に、布に包んでおいた半分のパンを取り出して食する。
- ④ その後、“贖いの杯”と呼ばれる、ぶどう酒を飲む。

■ユダヤ人伝道のため、メシアニックジューが用いるのがこの儀式。

イエスの時代にも同様の儀式が行われていたのではと考える学者も。



Ⅲ. まとめと適用 恵みに預かるための備えとは？

パウロが主の晩餐を通して投げかけていること

■パウロが強く促しているのは、主の晩餐への信者の備え。

①福音を信じて新生しているのか？

②日々、自分自身を吟味しているのか？

■パウロは目的を強く意識させる。何のための聖餐なのか？

Ⅰコリ11:26 ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。

→携拳の瞬間まで、福音を告げ知らせ続けるための聖餐の恵み。

→主に招かれるその時まで、福音を告げる使命に歩み続けること。

福音宣教の使命に派遣されるための、聖餐の恵みだと覚えよう

主への恵みと信者の使命を考えよう

- 救いは、主の一方的な恵み。福音をただ信じて、人は救われる。
- 信者に求められるのは、主を信頼し、主の道を続けていくこと。
日々、自己吟味を怠らず、主への使命に歩み続けているのかどうか。
 - ➔ 聖餐は、自らの信仰生活の確認の大切な機会でもある。
 - ➔ 自らを吟味し、主の恵みを味わったなら、派遣されていくべき。
- 与えられるだけなら、いつまでも、信仰の乳飲み子のまま。
与えられることになれきってないか？ あなたは何を与えている？

聖餐にあずかる私は、福音宣教の使命に歩んでいるのか？

「天のお父さま。わたしは、み子イエス・キリストが、

①わたしの罪(つみ)を贖(あがなう)うために十字架で死に、

②墓(はか)に葬(ほうむ)られ、

③三日目に復活(ふっかつ)したことを信じます。

わたしは、ただ信仰のゆえに、主の聖餐(せいさん)にあずかる幸(さいわ)いを得ました。

日々の自分自身の歩みを吟味(ぎんみ)し、さらに深く恵みを味わわせてください。

福音宣教の使命に歩むものとして、ここから遣(つか)わしてください。

主イエス・キリストのみ名によって祈ります。 アーメン」